論　壇

岩切章太郎の実践観光哲学

―日本の観光事業の先覚者―

Iwakiri Shotaro as a Pioneer of Japanese Travel Industry : His Pragmatism on Tourism

富田　勝彦*
TOMITA, Katuhiko

はじめに

このたび，永年の念願であった宮崎観光の父，岩切章太郎に関する著作がようやく完成にこぎついた。現在最後の見直し等準備を進めているが，これは本来，私が本学経営学部非常勤講師在職中に上梓しようと考えていたものの全体の構想がまとまらず，今日に至ったものである。

このたび本誌よりのお話を受けたので，この出版物の解説部分の概要をまとめて，その紹介にかえることとしたい。

第一部
　私と岩切章太郎―自己紹介にかえて―
第二部
　Ⅰ．岩切章太郎のプロフィール
　Ⅱ．章太郎の観光事業の基本理念
　Ⅲ．観光宮崎の父
　Ⅳ．日本の観光事業の先覚者としての業績
　Ⅴ．出版物のあらまし

＊もと本学非常勤講師

第一部

私と岩切章太郎―自己紹介にかえて―

昭和32（1957）年に函館バス，定山渓鉄道，昭和33（1958）年に北見バスを東急グループの総帥・五島慶太が矢継ぎ早に企業買収し，東急グループが北海道に進出し，観光開発を展開するという新聞記事が大きく報道された。

これが初めて私が観光事業に関心をもった出来事であった。当時高校２年の時であった。その新聞記事をみて，これから観光事業の時代がやってくるのではないかと思ったのである。その五島慶太が亜細亜大学の理事長であることを知り，亜細亜大学に進学することを決めた。

郷里旭川を離れ，昭和34（1959）年４月10日に上京した。当日は忘れもしない平成天皇が皇太子時代，美智子妃と結婚された日で，パレードをみ

てから亜細亜大学に行き入学手続をすませた。その年の８月に五島慶太は逝去された。高校時代，これといって打ち込んだものもなかったので，大学ではテニス部に入り，福島県会津田島町で行われた夏の合宿に参加し，合宿を終え帰郷途中，猪苗代駅で降りバスで磐梯高原に向かった。終点一帯は一般に裏磐梯といわれ，爆裂口が見える磐梯山と松原湖や五色沼がある高原地帯で，今まで見たことがない景観に圧倒され，五色沼の美しさのとりこになった。８月下旬でもあり観光客は多く，松原湖の遊覧船，売店，ホテル旅館，バンガローなど活気にあふれ観光事業とはこのようなことかと，目の当たりにしてあらためて観光事業に関心をもった２番目の時であった。

この磐梯高原の景観と観光事業の印象が強く，翌昭和35（1960）年大学２年の夏はこの磐梯高原の旅館でアルバイトをして過ごした。観光地の旅館で働いて一層観光事業に興味がわいてきて，夏休みが終わり，二学期に入り大学で同期の仲間４人で学友会学術文化連合会に観光事業研究会の設立準備を進めた。昭和36（1961）年４月に認可され，クラブ活動を行ったが，当時としては数少ない観光事業の書籍，有斐閣から出版された『観光事業』をテキストにして研究会を開き勉強した。これが私が母校で非常勤講師を引き受けた原点だと思っている。

この観光事業研究会は平成21（2009）年７月に解散となり，48年間継続したクラブ活動は幕を閉じた。国が観光政策に力を入れ，観光庁も発足し亜細亜大学にも経営学部にホスピタリティ・マネジメント学科ができ充実したことを思えば残念でならない。仲間４人と創立した１人として身近におりながら，もう少し何か協力できなかったかと悔まれる。

昭和37（1962）年には観光についてもっと深く知りたく，東洋大学の短期大学でホテルや観光に関する公開講座があったので受講した。

昭和38（1963）年３月，亜細亜大学商学部を卒業したが東急グループの北海道・定山渓鉄道，函館バス，北見バスからの求人募集はその年度はなく，やむなく観光事業には関係のない中小企業の塗料販売会社に就職した。それでも観光に関することを忘れることはなく，個人的に昭和48年に当時ヨーロッパで発展した分譲ホテルの一形態であるユーロテルの視察旅行に参加した。イタリア，スイスを中心にユーロテルを視察し，これから日本のリゾート地のホテル経営に普及発展するのではないかと思い，昭和48（1973）年秋に札幌で開催された日本観光学会で視察報告を発表した。その後私の予想や期待に反してあまり普及発展はしなかった。その時，観光事業のむつかしさを感じた。勤務先の創業者の出身地である島根県隠岐の島にホテルを建設したのでその事業計画に参画したり，後半には監査役の仕事も担当したりした。米子市・弓が浜の浜かすり民芸館の整備拡張事業のモンゴル館やペルシャ錦館の事業にも参画し，アジア博物館・井上靖記念館の開業準備を終え，オープンして一段落したので平成６（1994）年３月に30年勤続した会社を退職した。観光について本格的に勉強しようと思い，郷里旭川に帰って，旭川大学地域研究所の特別研究員となった。そして「北海道の第三セクターによる観光振興の現状と課題」を調査発表したり，札幌国際大学北海道環境文化研究センターで「観光振興とまちづくり戦略に関する一考察，北海道212市町村の現状と行政課題」について，大山信義教授と共同研究を実施し，調査結果を報告書にしたりした。

一方モンゴルとの交流により旭川，札幌，釧路，帯広でモンゴルの文化と物産展を開催し，北海道モンゴル親善協会の設立に参画する活動を行った。

北海道の観光振興を考えているとき，亜細亜大学の福永昭教授に今後協力していただこうと思い，北海道内の視察ドライブ旅をした。その帰京のおり，福永教授から「来年定年退職される教員がい

るので後任にどうですか」と声がかかり，平成11（1999）年４月に経営学部の非常勤講師として国際観光経営論，ポスピタリティ特講，ホスピタリティ経営論，ホスピタリティ演習等を担当し，平成23（2011）年３月定年退職した。その間12年間にわたり旅行産業経営塾（平成15（2003）年度），ホテル産業経営塾（平成16（2004）年度），立教大学観光研究所の公開講座のホスピタリティマネジメント講座（平成17（2005）年度），旅行業講座（平成18（2006）年度）で学んだ。

また北海道ニセコ町商工会・観光協会の研修会で「観光地の評価と振興」について講演をした。平成４（1992）年初めてモンゴルを訪問，今日まで毎年モンゴルを訪れ，24年間に合計40回前後旅行している。モンゴル国のガザルチン観光大学では「モンゴルの観光振興」について講演した。西端のホブド県から東端のドルノド県のノモンハン，北京から列車でウランバートル，ウランバートルから列車でロシアのシベリア鉄道でバイカル湖，イルクーツクから空路でウランバートルや南ゴビ，北部のフブスグル湖，世界遺産のウブス湖盆地，オルホン渓谷の文化的景観など主要な都市や観光地をほぼ訪問した。

このように亜細亜大学で12年間，母校に奉職できたことは，高校時代，東急グループで観光に関連する仕事をしたいという思いは大きく曲がりながらも人生の後半に実現でき，有意義な時間を過ごすことができたのは大変幸せなことであった。

常に観光に関心をいだいていた岩切章太郎を初めて知ったのは会社に就職して３年目の昭和40（1965）年８月，日本経済新聞の「私の履歴書」に岩切章太郎が掲載されているのを読んだ時であった。ここに掲載される人はいずれも一流の各界で活躍された人であるが，地方の人は珍しかったので特に印象が強かった。読み終えた時，地方にもこんな立派な人がいるのかという思いとその人生観や生涯を郷里宮崎県の発展に捧げる考え方に共感を覚えた。しかし観光については紙面の関係上，多くは書かれていなかった。その後，平成４（1992）年に『昭和の経営者群像３』にも経済人168人収録の中から50人に選ばれ，それが収録されている単行本も読んだ。

観光について深く勉強するため，郷里旭川に帰った時，岩切章太郎のことをもっと詳しく，特に観光事業について知りたく宮崎交通株式会社総務課に手紙を書いてお願いした。すると，社史編纂担当の高崎重満様からご丁寧な手紙と関係資料を平成９（1997）年５月に送付していただいた。その後経営企画部の橋本香代様からも資料送付をいただき，これらの資料を中心に，亜細亜大学在職中に岩切章太郎に関する単行本を出版しようといろいろと構想を練ったがなかなかまとまらず，退職してからその他の関連資料を集めて今ようやく出版準備を進めているところである。

第二部

Ⅰ．岩切章太郎のプロフィール

明治26（1893）年５月８日，宮崎県大淀村（現在の宮崎市中村東２丁目）に父岩切與平，母ヒサの９人兄弟の長男として生まれた。父は明治13（1880）年に家を継ぎ，家業のちり紙輸出，糸及び石油業に従事した。家は元来地方の素封家として名望があったので，章太郎は日州銀行や日向水力電気等の創設に参画し，これらの取締役として地方経済会のため尽力した。殊に宮崎鉄道（南宮崎～内海間の軽便鉄道）の創設は彼の非常な功績で，その開通は地方の交通，産業の発展に大きく寄与した。

岩切章太郎は生来非常に体が弱かったが，小学校も高等科を卒えてから，明治41（1908）年４月県立宮崎中学校（現在の宮崎大宮高校）に進んだ。中学校の時に元気になり，体も大きくなってスポ

ーツにも優れていたので，注目を浴びた。勿論，学業は抜群であった。

大正２（1913）年20歳で東京の第一高等学校に入学し，大正６（1917）年卒業。この間，大正４（1915）年には宮中，一高先輩の平島敏夫（後に国会議員）と伊豆一周の徒歩旅行中，土肥の港で愛鷹丸に乗り遅れる。ところが同船は沈没，危うく難を逃れる。

高校卒業の年，東京帝国大学法学部政治科に入学，同年父死す。大学在学中の大正７（1918）年に後藤タメと結婚，同年に卒業。

章太郎が大学３年の時，有吉忠一氏（神奈川県知事）を横浜の知事官舎に訪ねた時，どういう話のきっかけだったか，有吉氏が「岩切君，いよいよ卒業だね，卒業したらどうするの？」と聞かれるので，「郷里に帰ろうと思います」というと有吉氏がびっくりして，「何，宮崎に帰る？　宮崎に帰ったっても仕方がないじゃないか，いったい宮崎に帰って何をするつもりか」と聞かれた。そこで「民間知事をしようと思います」と言ってしまった。有吉氏は笑いだして「岩切君の考えそうなことだ，まあしっかりやってみるんだね」と励ましていただいた。この時有吉氏から「馬鹿な考えはよせよ」などといわれたら，民間知事構想も立ち消えになったであろうといっている。とにかく相手が知事さんだったから，つい口をすべらせて出た「民間知事」という言葉が，その後の章太郎の一生を貫く言葉になったのだから，人生とは面白いものである。大学を卒業したら宮崎に帰ろうということは大体腹が決まったが，「２，３年はやはり中央にいて，少し社会を勉強してからがいい」と言ってくれる人があって，住友総本店に入社，その後３年半お世話になった住友総本店を退職して宮崎に帰ることになった時，住友生活があまりに楽しかったためか，寂しい気がしたという。

田舎に帰るということは“田舎化と戦う”という厄介なハンディがある。宮崎に帰ればとりあえず家業はあるが，それでは物足りない。それで仕事のことは後回しにして，宮崎に帰ってからの基本方針というか，考え方というか，それだけはしっかり決めておこうと思い立って三つの方針を決めた。

第一　世の中には中央で働く人と，地方で働く人とあるが，あくまで地方で働くことに終始する。

第二　上に立って旗を振る人と，下に居て旗の動きを見て実際の仕事をする人とあるが，仕事をする側になる。

第三　人のやっていること，やる人の多い仕事はしない。新しい仕事か，行き詰って人のやらぬ仕事だけを引き受けてみよう。人のやっている仕事を自分がとって代わってみても，それはその人と自分との栄枯盛衰でしかない。しかし，もし新しい仕事を一つ付け加えたり，行き詰った仕事を立て直したりするならば，それだけ世の中にプラスになる。

だが，同時にそのことは結果として幾つかのこと，例えば大会社の社長になるとか，中央でなければ得難いこと，つまり栄達顕職のすべてを棄ててしまわなければならない。しかしそう言っても一抹の寂しさが残るので，その寂しさを消すために，更に一つの新しい夢を付け加えた。

それは，何でもよい，どんな小さなことでもよいから，手掛けるからには日本一とまでゆかなくても，何か日本の新しいモデルになるようなもの，新しい試みとして役立つようなものを作り上げてみたい，そこに生き甲斐を見出したいと思った。

この時の考えは，ただ一人の青年の夢に過ぎなかったが，幸いにして章太郎は終生，この夢をもち続けかつ貫いた。

著作には『無尽灯』，『続無尽灯』，『続・続無尽灯』，『心配するな工夫せよ』があり，そのほか講話を速記したものなど数多くあるが，観光哲学に

主　な　略　歴

生　年　月　日	明治26年５月８日
大正２年３月	宮崎県立宮崎中学校卒業
大正６年７月	第一高等学校英法科卒業
大正９年７月	東京帝国大学政治科卒業
同　　上	住友総本店入社（経理課調査係勤務）
大正13年４月	家事の都合により退社し帰郷
同　　上	宮崎回漕合資会社代表社員に就任
大正13年７月	宮崎農工銀行監査役就任
大正14年３月	宮崎商工会副会長就任
大正14年３月	宮崎県商工連合金副会長就任
大正14年４月	合資会社日米商会代表社員就任
大正14年10月	宮崎木材工芸株式会社取締役社長就任
大正15年５月	宮崎交通株式会社（当時宮崎市街自動車株式会社）取締役社長就任
大正15年12月	大淀運送株式会社取締役社長就任
昭和７年３月	日向中央銀行常務取締役就任
昭和８年１月	日向中央銀行頭取就任
昭和11年４月	宮崎合同運送株式会社取締役社長就任
昭和12年６月	日本パルプ工業株式会社監査役就任
昭和13年３月	宮崎商工会議所会頭就任
昭和13年６月	宮崎鉄道株式会社取締役社長就任
昭和13年８月	日向中央倉庫株式会社（男宮崎中央倉庫）取締役社長就任
昭和15年５月	宮崎通運株式会社取締役社長就任
昭和17年３月	宮崎亜炭工業株式会社取締役社長就任
昭和22年８月	日向観光協会（現在宮崎県観光協会）会長就任
昭和23年１月	宮崎県旅客自動車協会会長就任
昭和24年11月	宮崎県経営者協会副会長就任
昭和25年４月	日本乗合自動車協会（現在日本バス協会）理事就任
昭和27年２月	宮崎県総合開発審議会会長就任
昭和27年12月	極東航空株式会社取締役就任
昭和27年12月	南九州化学工業株式会社取締役就任
昭和28年１月	南九州地域地方総合開発審議会委員就任
昭和28年２月	宮崎ロータリークラブ会長就任
昭和29年４月	日本経営者団体連盟理事就任
昭和29年11月	運輸大臣より交通文化賞受賞
昭和30年３月	株式会社日米商会取締役会長就任
昭和30年10月	株式会社宮崎放送取締役社長就任
昭和31年７月	株式会社宮崎観光ホテル取締役会長就任
昭和31年９月	宮崎県交通安全協会連合会会長就任
昭和32年４月	宮崎日々新聞社取締役就任
昭和33年２月	全日本空輸株式会社取締役就任
昭和34年５月	宮崎県経営者協会会長就任
昭和34年11月	藍綬褒章受章
昭和35年９月	紺綬褒章受章
昭和36年１月	宮崎県バス協会会長就任
昭和36年４月	九州・山口経済連合会副会長就任
昭和36年11月	株式会社宮崎放送取締役会長就任
昭和37年１月	宮崎県体育協会会長就任
昭和37年５月	宮崎市名誉市民
昭和37年11月	宮崎交通株式会社取締役会長就任
昭和38年２月	宮崎県自衛隊協力会会長就任
昭和39年５月	日本観光協会副会長就任
昭和40年４月	勲三等旭日中綬章受章
昭和42年３月	福岡空港ビルディング株式会社取締役就任
昭和44年２月	観光資源保護財団副会長就任
昭和44年12月	宮崎県都市計画審議会会長就任
昭和46年11月	勲二等旭日重光章受章
昭和47年５月	宮崎交通株式会社敢締役相談役就任
昭和48年４月	九州・山口経済連合会顧問就任
昭和49年６月	日本観光協会常任顧問就任
昭和50年２月	国土利用計画地方審議会会長就任
昭和52年７月	株式会社日米商会取締役相談役就任
昭和53年４月	第４回土川元夫章受章
昭和56年６月	宮崎交通株式会社相談役就任
昭和60年７月	正四位・銀杯受賞

も明治人としての気概が溢れる。また仏教への造詣が深く，木津無庵先生との出会いで一層の啓発を受け，企業経営は勿論のこと，関与した多くの事柄でも随所に仏教の教え，考えが滲みでている。

Ⅱ．章太郎の観光事業の基本理念
（自然の美，人工の美，人情の美）

１　自然の美の創出

宮崎の美しい空，おいしい空気，きれいな水，あふれる草花，緑の山々などを大事に守り育てながら，章太郎は宮崎の自然環境の素晴らしさの創出に努めた。

○屋外広告物の規制や優れた景観を形づくっている樹木の伐採規制などを目的とした宮崎県沿道修景美化条例（昭和44年制定）の制定に向けて県民運動を展開した。

２　人工の美の創出

宮崎の自然の中に美しさを見つけ，その美しさ

をすべての人に気付いてもらうように，手を加え，植え足し，切り出す等の手法で，観光地の整備・創出に努めた。

○フェニックスの葉かげから太平洋を見てもらったらもっと美しく見えるだろうと，道路沿線に植栽し，群落を造った。（日南海岸ロードパークの創出）

○365日，花のある観光地づくり…花の植栽を工夫した群落づくり。（萩の茶屋，生駒高原）

○美しい景観を妨げる不要な木やヤブを切って，赤松の自然林やミヤマキリシマの群落が観賞できる観光地を創出した。（えびの高原）

3　人情の美の創出

観光客に，宮崎にまた来たいと思っていただくことに心を砕いた。

○先ずにっこり真心で応待。

○宮崎にようこそ来ていただいたという感謝の気持ちで接する。

○細かい心づかいで体や頭を働かせ，心づくしのもてなしを展開。

宮崎がここまで有名になったのはこの章太郎の基本理念のためで，それは本当の観光地は自然の美と人工の美と人情の美の三つが一つに融けあったところにあると考え，それを貫きながらロードパークという形で具現したところにあるのではないか。更には一度こられた方にまた来たいと思っていただくようにという，この一点に集中努力してきたことにあるのではないか。章太郎はそう述べているがこれは観光事業の基本理念のすべてを表している言葉ではないか。それが「観光のあるべき姿」であり，これを永く実践したことが評価され，観光基本法という法律にも反映されているものと思う。

この背景には章太郎の現場主義と観光客に対する行動観察がある。基本理念と現場の実践が章太郎の観光哲学を形成している。これは研究者や過去の事業家の成功例をまねたものではなく，独自のものである。

多くの著作や講演集には彼の観光事業の基本理念に関する言葉がある。以下に主なものを紹介する。

○細かい心づかいをしよう。体を馳せらせ，頭を働かせて，どうしたら，みなさんに喜んでいただけるか，満足していただけるかと，一生懸命に作り上げ，考えあげた細かい心づかいがあってこそ，はじめて私共のサービスが完成されるのである。

（29.3「心づかい」）

○観光道路の完成，観光施設の整備は一会社の力だけでやれるものではない。どうしても県・市当局をはじめ，挙県一体の努力をお願いしなければならないのであるが，私共は私共として，できるだけの努力を続けると共に足らざるものを私共のサービスで補いたいと思うのである。

○岡山鉄道管理局の方から示された雑誌に宮崎のことが載っていたが，その標題は「サービスもまた観光資源なり」というのであった。青島も日南海岸も景色だけいったら岡山の海岸に及ばない。ただ何があったかというと宮崎交通のサービスだけがあった。それで私は，はじめて「サービスこそ最も大きな観光資源である」と知った，ということである。サービスもまた観光資源なり，私共も今一度この言葉をかみしめ，味わってみようではないか。

（31.10「サービスもまた観光資源なり」）

○南方へのあこがれといっても，椰子やフェニックスが茂っているというだけで観光価値が上がるのではない。この南方的な樹木の景色にそえて，美しいプロムナード（遊歩道）やすばらしいホテルやレストランなど，すべて近代的設備も完成され，すべてが一つの美しい観光的雰囲気に融合され，統合された時，

はじめて全世界の人々の心を魅する力が生れるのである。

（32.7「南国日向はこれでいいか」）

○一つ一つの花はたいした事もないが，沢山集めると，とても美しい群落の美を作りだせるからである。

（39.7「カンナの道」）

○観光とは知らせる，見せる，また来たいと思わせるの三つだが，その最後のまた来たいと思っていただくという一点にすべてのピントを合わせて，宮崎交通はやってきたのである。

（40.9「日経新聞『私の履歴書』」

○自然の美と人工の美と人情の美，この三つがただ一つにとけあってこそ本当の観光地が出来上がるのであって，こういう考え方に立っている者からみると，近頃の観光開発の名をかたる自然の美の破壊など，何という心なきやり方であろうかとしみじみ悲しく思うのである。

（42.6「しやりんばい」）

○日南海岸がこれほどまでに世間にもてはやされるようになった原因の一つが絶えず木払いと草刈りをしているところにあるのである。

（42.9「木払い」）

○宮崎の観光の特徴はロードパークであり，また会員バスの発展のためにも次々と新しい観光地作りが必要であるが，コスモスと梅林，梅の茶屋もきっと，その一翼をになってくれるであろう。それにしてもコスモスでさえ10年がかりである。何事も10年，20年と黙々として努力を続けることが必要であるとしみじみ思うことである。

（43.11「コスモス」）

○日南海岸堀切峠の山桜も五千本を越えた。これも，もう五年たったら見違える位になるだろう。一番初めに植えたのはヒットラーユーゲント※が来た時だから25，26年前になるが，その時植えた桜は消えてしまって，今あるのは戦後になって新しく植え始めたものである。何事も20年，30年，50年，100年と気長にかからないといい景観など出来上がるものではない。

（44.5「吉野山の山桜」）

※第一次大戦後ドイツの首相に就任したヒットラーが組織し，自分の名を冠したドイツ青年団の名称

○自然の中に美しさを見つけ出し，その美しさをすべての人に，なる程美しいと感じていただくように手を加えていくという，私共のロードパークの植え足し，切り出しのやり方もまた大事な仕事だ。

（45.5「日本の美しさ」）

○宮崎の観光は数である。もっぱら数量で勝負する外ないのだと考えて，百万本のサボテンとか一万本のリュウゼツランとか言ってきたが今度のコスモスによって，はじめての方に数の力ということがぴったりと分かっていただいたのである。

（45.11「黄金の海岸」）

○経済発展と環境汚染，観光開発と自然破壊この二つはどうしても両立し難いものであろうか，いやそうでは決してないのである。私共は既に自然破壊のない観光開発をいくつかやって来た。

（47.9「かけがえのない地球」）

○花好きの人は一本の花でも直ぐ気がついて，心にきざみつけていただくが，一般の人々は見ることは見られても，直ぐ忘れて仕舞われるらしい。ところが大群落があると凡ての人が，これは驚いて下さるばかりでなく，その時，今まで見て忘れていた沿道の花も一緒に思い出して，すばらしかったといい心に強く印象づけて下さるものらしい。だからどうしても，どこかに中心拠点になる大群落が出来ないと駄目だと言うのが私の考えである。

（48.6「サンゴシドウ」）

○黄金の海岸の夢をいだき始めてからだと17年，コバセンナが見つかってからでも10年になる。全く名所作りは年期がいる。眼に見えない努力を黙々と続けて，初めて世に出るのである。

（49.12「日南海岸」）

○私共の夢は南国宮崎の上に花の宮崎を重ね合せ，更に匂いの宮崎を付け加えたいということ。

（50.9「宮崎を見直そう」）

○並木は歩く人の為に影を作る役目がございますが，そればかりではありません。景色の出来上がった並木は景色を見る額縁の役目もあったのです。

（50. 講演「秋沖縄と観光」）

○「ローマは一日にして成らず」という有名な言葉があるが，何事も長い間のたゆみない努力があって初めて物になるのである。花の宮崎も一日にして出来上がったのではない。匂いの宮崎も亦然りである。何事も広い裾野が必要である。皆んなが手をつないで広い裾野作りに努力したいものである。

（51.7「裾野を広げたい」）

○乗客は自然に出来るものではない。私共の努力で作り出さねばならぬものであり，又作り出し得るものである。乗客のニーズをよく察して，それに合致するような運行とサービスを徹底して実行すれば乗客が喜んで利用していただくようになるのである。宮崎交通が50年の歴史の間に築き上げてきた事業精神，サービス精神を今こそ一段と発揮すべき秋ではないかと思うのである。

（51.11「料金とサービス」）

○観光宮崎の生命は宮崎の美しさである。よそにない美しさがあるからこそ遠きをいとわず全国から来ていただくのであるが，この宮崎の美しさはもとからあったものばかりではなく，長い間かかって一歩一歩と私共が作り上げて来たものである。

（53.4「躓いた石を踏み台に」）

○観光サービスの方法は色々であるが，その根本はお客様の気持ちになって，細かい心づかいをする事だと思う。そしてこのことを私に教えてくれたのは長崎市の福島屋という旅館の番頭さんだった。そしてこの事がその後の宮崎交通の色々のサービスの根底に力強いバックボーンとなって働いているのである。

（53.9「観光サービスと私」）

○自分が感心しないと人が感心するはずがない。観光とはそういうもので，地元で評判にならないものが，どうして他県人の共感を呼びますか。「あなたそこへ行ったか，いやまだいっていない。行ってみなさい，それはすばらしいところだ」そんなことを常に思っている。観光は常に工夫しなければならない。見どころをつくらなければいけない。何度いってもいい観光地にはそれだけの魅力がある。

（56.6 宮崎日々新聞「米寿を越えて」）

○樹木の名所は三つのことがないと名所にならない。

一つめは老木があること。

二つめは美しい植え方による。

三つめは数量が多いこと。

以上三つが揃うことが名所の条件になる。

（44.9 講演「自然の美，人工の美，人情の美」）

Ⅲ．観光宮崎の父

宮崎県民の多くの人は岩切章太郎のことを「観光宮崎の父」といい尊敬と親しみをもって呼んでいる。その理由について考えてみよう。まず宮崎県の観光のあゆみの年表をみると，主要事項が章太郎と自ら創業した宮崎交通に関するもので大半

を占めている。

年表，宮崎県観光のあゆみ（主要事項）

○大正15年　宮崎市街自動車株式会社設立
○昭和６年　定期遊覧バス営業開始
○昭和８年　神都日向大博覧会開催
昭和９年　霧島屋久国立公園が全国１番目の指定を受ける
○昭和12年　日南海岸小弥太郎丘陵にサボテン林を作る
○昭和14年　青島に「こどものくに」開園
昭和15年　八紘台（平和の塔）完成
○昭和29年　橘公園にフェニックス51本，ロンブル31ヵ所設置
○昭和30年　日南海岸が国定公園に指定
○昭和34年　巨人が宮崎市でキャンプ開始
昭和35年　島津久永・貴子夫妻が新婚旅行で来県
昭和37年　皇太子ご夫妻（現天皇皇后）来県
昭和38年　広島が日南市でキャンプ開始
昭和39年　東京オリンピック聖火が平和台を第２基点として出発
○昭和40年　宮崎を舞台としたNHK連続ドラマ「たまゆら」放映
○昭和40年　新婚旅行ブーム起こる
昭和42年　新婚旅行専用列車「ことぶき号」運転
昭和43年　平和台で第１回フラワショーを開催
○昭和44年　全国に先駆けて沿道修景美化条例を制定
昭和44年　フェニックス国際観光創業
昭和49年　第１回ダンロップフェニックストーナメント開催
○昭和49年　新婚旅行ブーム頂点，全国100万組の37万組宮崎へ
昭和49年　県外観光客500万人
昭和54年　中日が串間市でキャンプ開始
○昭和54年　第34回国体，宮崎国体開催
昭和56年　フラワショー会場が県運動公園へ移転
昭和57年　近鉄が日向市でキャンプ開始
昭和59年　歩道つり橋としては日本一の綾町「照葉大吊橋」が完成
○昭和60年　岩切章太郎が死去

※○印が岩切章太郎と宮崎交通が関係

大正15（1926）年，宮崎市街自動車株式会社（現在の宮崎交通）を創立し社長に就任，以後さまざまな事業を手がける。なかでも観光事業に力を注ぎ，昭和６（1931）年初めての観光事業として定期遊覧バスの運行を開始。このときバスガイドの採用と養成に頭をいためるが，自ら現場で指導し，純真な娘さんのサービスを基本とした。

昭和８（1933）年に始まった「祖国日向産業博覧会」では，遊覧バスに乗ればその地方のすべてがダイジェストで分かるような仕掛けであったため，宮崎バスの名が全国的に一躍有名になった。その原稿は章太郎自身が調査し書いたものであった。

昭和14（1939）年に「こどもの国」開園，入園料は大人も子供も一律10銭「おじいさんもおばあさんも，お父さんもお母さんも，お兄ちゃんもお姉ちゃんも今日は子供になって子供券をお買いください」とここにも章太郎の思想が表れている。

昭和22（1947）年，宮崎観光協会会長に就任，昭和25（1950）年，宮崎観光バスを復活，観光バス新車14台をつらね「東海道53次，声の旅」観光宣伝隊が東京から宮崎まで宣伝行脚し，話題を呼ぶ。その後，日南ロードパーク（こどものくに，堀切峠，サボテン公園），えびの高原，都井岬などの整備を図る。

昭和34（1959）年には全国観光バスガイドコンクールで宮崎観光バスガイドが優勝し，その後も人気を保ち続け，全国から「まごころサービスを参考に」と訪れたバス会社や観光関係者が引きも

きらなかった。

昭和30年代後半から50年代前半にかけて宮崎への新婚旅行ブームが起きた。これは皇室の若い２組のご夫妻，昭和35（1960）年，貴子様ご夫妻，昭和39（1964）年，皇太子ご夫妻（現天皇，皇后）が宮崎を訪れたことが，このことに拍車をかけた。週刊誌・新聞，テレビでとりあげられ，また NHK の連続ドラマ，川端康成作の「たまゆら」が連日放映され，宮崎への新婚旅行ブームは社会現象ではないかとさえ思われた。

章太郎は観光ブームについて「いいきっかけと相応しい内容の二つが揃わなければならぬ，どんないいきっかけがあっても相応しい内容がないとブームにはならないし，どんなにいい内容であってもいいきっかけがないとブームが起こらないものである」といっている。

このいい内容を実現するため，昭和30（1955）年，日南海岸の国定公園指定へむけ尽力した。フェニックスを植栽し，南国宮崎を創出し，岩切章太郎のリーダーシップのもとに10年，20年続けた景観形成に花が開いたことによるものと多くの県民は評価している。

以上，宮崎県の観光を概観すると，宮崎の観光は章太郎による自然の美，人工の美，人情の美，の観光理念で「大地に絵をかく」情熱とロマンの精神のもとに生み育てられてきたことがわかる。

章太郎は，多忙な経済界活動の傍ら，宮崎空港についても優れた先見性，たゆまぬ研究によって，当時からローカル空港では珍しいと言われる施設を造り上げた。その外にも，宮崎交通グループ各社の万般にわたり卓抜な経営指導を行うと共に，国，県，経済界，観光業界の各種委員会，審議会において卓越した見識によってリーダーシップを発揮し，高く評価された。

昭和60（1985）年７月16日，章太郎はその生涯を閉じた。翌日の宮崎日々新聞では一面のトップ記事や各紙面でとりあげられ，社説でも「大地の哲理に生きた人」としてその功績がたたえられた。一民間人で現役を引退した者が，これだけ大きくとりあげられたことは今まで見たことがない。

また宮崎交通の社葬では3000人の会葬者があった。大都市でもこれだけの会葬者はめったになく，地方都市の宮崎市で各界各層の会葬者があったことは，いかに章太郎が宮崎県民，市民に愛されていたかがわかり「観光宮崎の父」と呼ばれていることが十分理解される。

昭和62（1987）年に宮崎市が彼の偉業を広く永く継承しようと考え，昭和63（1988）年に岩切章太郎賞を創設した。

自治体が条例をつくり，20年もの永きにわたり顕彰事業を実施したことは全国的にみても異例のことであり，この一事を以ってしても岩切章太郎の偉大さがわかる。

Ⅳ．日本の観光事業の先覚者としての業績

岩切章太郎の業績について下記のように要約して紹介しよう。

⑴　明確な観光事業の理念，自然の美，人工の美，人情の美をかかげてこれを実践した。

⑵　日本で遊覧バスを開始したのは東京，京都，別府に次いで４番目であったが，当時宮崎という地方都市で成功させたことはその後地方都市での遊覧バス事業者に大きな影響を与えた。

⑶　昭和の戦前，戦中，戦後の半世紀以上の永きにわたり，観光事業の第一線で活躍した。

⑷「南国宮崎」というコンセプトの創出により「バスの車窓から自然景観を見せる」観光を開発し，先鞭をつけた。

⑸　当時，社会現象といわれるくらい新婚旅行者が宮崎を訪れた。そのきっかけや受入れ態勢を確立した。

⑹「道路の公園化」というロードパークの思想

を日本で初めて日南海岸で実践し，この後のシーニックバイウェイや日本風景街道等街道観光の原点という実績を残した。

⑺　宮崎県が全国にさきがけて沿道修景美化条例を制定した。その先鞭をつけたきっかけや思想は，日本の景観行政に大きな影響を与えた。

⑻　観光事業は総合産業であるとの考えから，その経済波及効果を認識し，宮崎の地域経済の発展に貢献した。

⑼　平成の時代に入って，政府は観光振興のために「観光カリスマ」という制度を設け，全国で100名を選出した。その目的とするところは昭和６（1931）年からすでに章太郎は実践しており，いわば観光カリスマの先達であった。

⑽　宮崎県の昭和の観光事業の歴史をふり返ると主要な事項は章太郎に関するものである。宮崎県を観光後進地から観光先進地に発展させた尽力に対し，多くの県民，市民は章太郎を「観光宮崎の父」と呼んでいる。

⑾　観光関係団体の公職や企業役職と表彰については中央，九州から宮崎県に及ぶ。観光振興と自然環境保護という両面にわたる章太郎の実績と物事の本質を見通す識見は，日本の観光行政や環境行政に大きな影響を与えた。

⑿　宮崎市が「岩切章太郎の偉業を永く継承しよう」と条例をつくり「岩切章太郎賞」を制定し，全国の関係者に呼びかけ，20年の永きにわたって顕彰事業を行った。地方自治体がこのような顕彰事業を行うのは珍しく，「観光の文化賞」といわれ高い評価を受けた。いかに章太郎が故郷宮崎の発展に貢献したかが理解できる。

以上のような業績を残して，観光業界の発展に尽力すると共に，郷里宮崎のため大学時代に考えた民間知事の発想と，住友総本店で３年間の勤務を終えて宮崎に帰郷するとき考えた三つの方針は章太郎の若い青年の夢であったが，それはまた生涯ぶれることはなかった。

例えば昭和38（1963）年，池田内閣当時，国鉄総裁の候補になったが，それは地方のバス会社の社長としては異例のことである。「宮崎に岩切あり」とその見識と手腕は中央でも高く評価されていたのである。

昭和44（1967）年，当時の佐藤首相から全日空の社長にと懇請され，元首相岸信介（一高，東大で同期）も直接説得したが「私は宮崎に夢（大地に絵をかく）を抱いて帰った男です，その夢が実現するまで宮崎を離れません」といって断った。国会議員，知事，市長に出馬したらとすすめる人が多くいたが，自らかかげた青年時代の信条を曲げることなく生涯をまっとうした。

一高時代同期で親交のあった谷川徹三（哲学者，元法政大学総長）は，「私の最も尊敬している友人で，全く天晴れな男である。彼が『こどものくに』を作ったことを聞いたが，最初は常雇いの掃除人を多数置いて，一つでもゴミが落ちていたら直ぐ拾うように徹底的にゴミ拾いをさせた。そのうち子供たちもだんだん紙屑や空箱などを捨てなくなり，今では一人の掃除人を置くだけになったという。これが岩切のやり方で，このやり方で彼は観光宮崎をユニークなものとした。彼は宮崎交通という一会社を創り，育てる中で，独自の社会教育と文化の仕事をやり上げたのだ」と評している。

今や地方創生の時代といわれ，観光立国論がさまざまに掲げられているが，地に足をつけた岩切章太郎のような人材こそが真に求められているのではなかろうか。

参考文献・引用資料

岩切章太郎著『無尽灯』鉱脈社，平成４年
岩切章太郎著『続無尽灯』講談社，昭和47年
岩切章太郎著『続・続無尽灯』講談社，昭和55年
『私の履歴書　昭和の経営者群像（３）』，平成５年
『岩切章太郎講演集』鉱脈社，平成10年
岩切章太郎著『心配するな工夫せよ』鉱脈社，平成10年
『宮崎交通70年史』宮崎交通，平成９年

『みやざきの観光物語』宮崎市観光協会，平成９年
『政策課題研究報告書』宮崎県市町村振興協会，平成22年

Ⅴ．出版物のあらまし

１．タイトル　大地に絵をかく
　　岩切章太郎の実践観光哲学
２．内　　容　昭和年代の日本の観光事業の先覚者であり，宮崎県の観光史の主要な部分を占める岩切章太郎の観光事業の実績と観光哲学の集大成。
３．原 著 者　岩切章太郎
４．監 修 者　渡辺綱纜
５．編・解説　富田勝彦
６．企画意図　岩切章太郎の既刊著作，講演集を底本とし，宮崎交通70年史等観光関係資料を整理分類し，岩切章太郎の観光哲学を集大成し，観光のあるべき姿を追及し実践した彼の発想と戦略を，観光業界関係者に観光振興の指針として参考にしてほしいという意図を有している。
７．出 版 社　ユーフォーブックス株式会社
８．発 行 日　平成28年中旬予定
９．体　　裁　１ページのサイズ15cm ×21cm
　　本文600ページ
　　カラー４ページ
10．目　　次

大地に絵をかく岩切章太郎の実践観光哲学
はじめに
Ⅰ章　岩切章太郎のプロフィール
　１．評伝　岩切章太郎
　２．年譜，団体公職歴，企業役職歴，表彰受賞歴
Ⅱ章　岩切イズムの観光理念
　１．自然の美　かけがえのない日本
　　（講演　昭和47年11月）
　２．人工の美
　　＊観光事業の特色
　　＊花いろいろ
　　＊花の宮崎（講演　昭和51年４月５日）
　　＊建築　いろいろ
　　＊こどものくに
　　＊ロードパーク　日南海岸
　　＊えびの高原，生駒高原，橘公園
　３．人情の美
　４．自然の美，人工の美，人情の美
　　（講演　昭和44年９月８日）
Ⅲ章　観光諸相
　１．観光振興
　２．交通関連
　　＊バス，鉄道
　　＊航空
　３．観光いろいろばなし
　　（講演　昭和34年８月11日）
　４．観光立国について
　　（講演　昭和36年８月28日）
　５．観光基本法について
　　（講演　昭和38年６月17日）
Ⅳ章　観光哲学実践機関　宮崎交通
　１．宮崎交通の概要
　２．観光事業の歩み（年表）
　３．観光事業実践の軌跡
解説
監修を終えて